

一 般 演 題

01 白血球吸着療法施行中の抗酸化動態

筑波大学臨床医学系内科

平山 暁, 永瀬宗重, 楊 景堯, 樗木隆聡, 甲斐平康, 下畑 誉, 白井丈一, 室かおり, 山縣邦弘,
平山浩一, 小山哲夫

【目的】 白血球吸着療法(LCAP)は吸着に際し白血球活性化を伴うため, 活性酸素種の発生による抗酸化能低下の懸念がある. 今回我々は LCAP 施行時の抗酸化動態をヒドロキシルラジカル($\cdot\text{OH}$)消去活性および過酸化脂質濃度により検討した.

【方法】 潰瘍性大腸炎患者に対するアダカラム^Rおよびセルソーバ^RによるLCAP施行に際し, 治療開始時にカラム前後より, また治療終了時にカラム前より採血した血漿を用いた(n=7). $\cdot\text{OH}$ 消去活性は 10%血漿に Fenton 反応により発生した $\cdot\text{OH}$ を添加し, DMPO をスピントラップとして電子スピン共鳴法にて測定した. 過酸化脂質は八木法にて TBARS として求めた.

【結果】 $\cdot\text{OH}$ 信号強度は開始時 0.86 ± 0.11 , カラム後 0.95 ± 0.07 , 終了時 0.70 ± 0.10 であり, カラム通過により信号強度の増強(消去活性の低下)を認めたが, 終了時には開始時より有意に消去活性は改善した. 血漿中 TBARS は開始前 2.10 ± 0.72 , 開始後 1.82 ± 1.06 nmol/ml であり治療中低下傾向を示した. カラム通過による差異はなかった.

【結論】 LCAP ではカラム通過により血漿中の $\cdot\text{OH}$ 消去活性は低下するにもかかわらず, 治療により全身性の抗酸化能は改善に向かう.

02 小児難治性ネフローゼ症候群(原発性巣状糸球体硬化症)に対する白血球除去療法の試み

東京女子医科大学腎臓小児科¹⁾, 現)秋田大学医学部小児科²⁾

三上珠希²⁾, 服部元史¹⁾, 豊浦麻記子¹⁾, 染谷朋之介¹⁾, 荻野大助¹⁾, 中倉兵庫¹⁾, 近本裕子¹⁾,
永淵弘之¹⁾, 宮川三平¹⁾, 甲能深雪¹⁾, 伊藤克己¹⁾

原発性巣状糸球体硬化症(原発性 FSGS)は, その多くが治療抵抗性を示して腎不全に進行し, さらに腎移植後も高率に再発を認める難治性疾患である. 我々の施設では, 高脂血症による腎障害惹起・進行仮説ならびに原発性 FSGS の蛋白尿発症原因に関する circulating factors(CFs)仮説に基づいて LDL 吸着療法(LDL-A)や血漿交換療法(PE)を試みてきた. しかし残念ながら, これらの血液浄化療法が無効な症例も存在する. こういった症例に対して, CFs を産生していると考えられているリンパ球や単球を直接患者血液中から除去することを目的として白血球除去療法を試みたので, プレリミナリーな段階ではあるが報告する. 対象は 6 歳の原発性 FSGS の男児および 18 歳の原発性 FSGS の移植後再発の男子の 2 例. 週 2 回計 6 回の白血球除去療法(旭メデイカル, Cellsorba)をおこなった. 症例数が少なく, その背景も異なるため治療効果についてはさらなる検討が必要であるが, 小児でも体外循環を用いた白血球除去療法は安全に実施可能であり, 新しい治療法としての可能性が期待された.